

生田正庵年譜稿

東洋大学の漢学者たち(その二)

吉田公平

Yoshida Kohpei

はじめに

『東洋大学人名録―役員・教職員。戦前編』（東洋大学井上円了記念学術センター編。一九九六年三月二十日発行。所長新田幸治）の「生田格」の項目には「分類教員。在職年昭和四年」。身分東洋大学教授。教科目昭和四年度漢文学（専門部）」とあるのみである。戦前期の職員名簿が不備なために今さら確認のしようもないのだが、いかにも素っ気ない記述である。赴任年次・退職年次が不明なばかりではない。在職中の勤務内容を語る資料は無い。それは東正堂の場合も同案であった。また、東正堂にせよ生田正庵にせよ、あれほどに沢山の文章を書き残したにも関わらず、東洋大学に直接に言及することは無かった。いったい、彼等にとつて奉職している東洋大学とはそもそも何であったのか。或は彼等が奉職した大学は帝国大学ではなかったもので、社会の木鐸として文章なりを公表する場合に、奉職する大学を名乗るほどのことはないと自覚し、むしろ在野にあることを誇りとして、「東洋大学教授」であることを看板として公表することを探させたのであろうか。

彼等の自己認識はどうあれ、東正堂にせよ生田正庵にせよ、日本近代期における漢学者、それも学術考証学としての漢学者ではなくして、漢学を基盤にして当代の課題に立ち向かった哲学者としての漢学者、とりわけ陽明

学を基本理念として機関誌『王学雑誌』『陽明学』を刊行し、政財界の大物を巻き込んで思想運動を展開した、その意味での漢学者であった。

東正堂は山口県岩国の人。生田正庵は兵庫県神崎郡田原村の人。彼等の先学には東正堂の父である東澤瀉がいる。その東澤瀉の講友関係には池田草庵・春日潜庵・吉村秋陽・楠本端山・楠本碩水・大橋訥庵などがある。次世代に相当する東正堂・生田正庵たちは、先学世代の嗣子や門弟子たちが人脈を豊にした。それはそうなのだが、やはり有力な導き手は先学世代であった。東正堂・生田正庵にとっては、長命を保たれた楠本碩水に示教を受けたことは、とりわけ感激であったようである。

時運は儒学思想を旧態のままに墨守するばかりでは通用しない所まで展開していた。その時運に乗って所謂陽明学思想を陽明主義として徹底して斬新な思想運動を果敢に展開したのは、大阪陽明学会を組織し機関誌『陽明』『陽明主義』を刊行した石崎東国である。東正堂・生田正庵は、同じく陽明学を看板にしながらも、石崎東国と活動路線を異にする。東京と大阪。陽明学と陽明主義。東正堂と石崎東国。両者は鋭く対立する。大正リベラリズムに加担した石崎東国の陽明主義運動は、所謂陽明学の解釈可能性の実験としては極めて興味深い運動である。本稿はその説明を行う場所ではないので、この問題は先送りして、東京の東正堂グループの思想運動を明らかにするための基礎作業の一つとして、東正堂の良き助演者であった生田正庵の生涯を年譜稿という形で公表することにしたい。

立論そのものとしては石崎東国の運動に魅力を感じながらも、同時代感覚としては東正堂・生田正庵の路線が大方の支持を得ていた。そのことが実は彼等の陽明学理解の特色でもあり限界でもあるが、さりながら、歴史的には大きな役割を果たしたことは紛れもない事実である。日本近代期における漢学運動の中の陽明学運動を俯瞰

する作業を、今後の課題としながらも、今は、取り敢えず生田正庵の生涯を確認したい。

生田正庵は殆ど無名の人である。唯一、専論は荒木見悟先生の「生田正庵小伝」（九州大学中国哲学論集八号。一九八二年十月一日発行）である。本稿はこの荒木先生の論考に大きく依拠している。特に生田正庵・東正堂・楠本碩水の間で交わされた書簡は、今、九州大学に所蔵されている由であるが、読解されたものが公開されていないので、荒木見悟先生が論文の中で紹介されているものは、全文を収録した。（江戸期の哲学遺産は活字化されているのは）ごく一部である。幕末維新期の書簡は『幕末維新陽明学者書簡集』（陽明学大系所収）『幕末維新朱子学者書簡集』（朱子学大系所収）が刊行されているものの、未公開のものがおびただしい。期して待つべし。）

東正堂は『陽明学』の紙面に、瀬岡山を筆頭とする中江藤樹の門流の講学録を掲載した。東正堂が精力的に調査して収集した基本資料集である。それは今、かつて東正堂が奉職した東洋大学図書館に所蔵されている。一部が高島市藤樹記念館にも所蔵されているが、分量としては東洋大学図書館の方が充実している。東正堂が収集・筆写したものを生田正庵が改めて筆写したものが多数を占める。このことについては、先に調査して「柴田甚五郎旧蔵日本陽明学関係書について」（東洋大学。井上円了センター年報十号。二〇〇一年七月二十日）「東正堂の藤樹後学資料の書写」（東洋大学。井上円了センター年報十四号。二〇〇五年九月二十日）として発表した。本年譜稿では「東正堂の藤樹後学資料の書写」の記事を参照した。

また生田正庵の蔵書は荒木見悟先生・町田三郎先生のお骨折りで、今は九州大学文学部図書室に「崎門文庫」として所蔵されている。その蔵書目録が「昭和六十年八月一日。崎門文庫目録。九州大学中国哲学史研究室」である。序跋がないので「崎門文庫」と命名された経緯などは分らない。この「崎門文庫」を一覧してすぐに気が附くのは、生田正庵の書写本が多いことである。今、東洋大学に収める中江藤樹心学派の関連資料には、東正堂

が書写したものもあるが、生田正庵が書写したものの方が分量としては多い。生田正庵は書写した際に、その開始した年月日と終了した年月日を記している事が多い。「崎門文庫」に収める書写本に記された書写年月日もまた、生田正庵の修学過程をしる貴重な記録である。煩を厭わずに分明なものは、原文を添えて年譜に記録した。当時は漢籍が回っていたとはいえないものの、入手が容易でなかったこと、また写本のままに伝承されるものが少なくなかったことを有力に証言するものである。学問する者の真摯な姿を如実に物語る。生田正庵が書写した写本であることが分明なものであっても、書写した年月日が記されていないものは、この年譜稿には記載されていない。書写された写本の内容から類推して、その前後に書写されたのではないかと、年月日を予想できるものがないではないが、確言できないので、年譜稿には記入しなかった。待考。

親しく閲覧する機会を与えて頂いた九州大学文学部図書室の関係者の皆さんに改めて感謝したい。九州大学文学部は小生が初めて奉職した大学である。その図書室は蔵書量が増えて、その当時とは配架模様が変わってしまったが、書庫に一步足を踏み入れるや、かつて入り浸った昔日を思い起して懐かしかった。

東正堂に寄添う形で生田正庵は生きたが、その思想形成は東正堂にまみえるまに貴重な軌跡を遂げており、後にそれは朱子学・陽明学理解にも歴然としている。折々に『陽明学』に発表した論文には東正堂の批正が附加されており、興味深いのが、毒湛老師に参禅した経験のある生田正庵には、東正堂とは違った独自の心性論理解がある。しかし、それも上京して東正堂の傍に仕えることが長くなり、社会思想の怒濤に曝されると、その儒学理解に柔軟性を失う傾向が強くなる。生田正庵の陽明学理解を一捌けに塗ることは困難なようである。その考察は次の課題としたい。今は取り敢えず、彼の生涯を俯瞰することにする。

東正堂と生田正庵の師弟関係を調べている際に、いつも念頭に去来したのは、楠本端山・碩水と岡直養の師弟

関係であつた。日本近代期における儒学思想を再考するときに、このことも留意しながら、作業を進めることにしたい。

さて、それでは、東正堂は生田正庵をどのように捉えていたのか。このことを前もって確認しておきたい。そのために好都合な短文を東正堂が残しているので、次にそれを掲げることにする。東正堂は『困知統録』の前置きに

予自居山中。乃已著有困知。以自省焉。迨上京後。則一事無成。荏苒歲月。亦既成翁矣。然年既久。則猶得數語也。仍題曰困知統録。庚申之歲。正堂書。

という。庚申は大正九年。正庵五十一歳。刊行は大正十二年八月五日。正堂六十四歳。卷末に「附記困知関係諸子」を附して

所謂関係者。謂序跋評者並投資助印費者。此其人。學問業務。雖有各殊。要之。凡皆世之有意於我者也。因悉列記其氏名字於左。大正十二年七月。正堂識。

という。総勢四十三名（楠本碩水・並木栗水・谷口藍田・副島滄海・洪沢榮一・井上哲次郎・杉浦重剛・菊池晋・高瀬武次郎・山田準・奥宮正治・斉藤一馬・岡本進徳・南部保・曾田静庵・生田正庵・大塚豊三郎・野村允中・大村梅軒・頼俊直・八巻九萬・龍口龍尾・生出大癖・碓俊聡・田中稲城・門司天山・武内箕山・川岡仲敬・白銀若水・粟村経山・山中馨・中山雷響・柴田甚五郎・松田幸治郎・原田久兵衛・岡田久吉・金子政次郎・小川豊三・細沼強・桑原壽一・前島縣次郎・藤田正二・宮島榮一）。生田正庵は十六番目に紹介されている。この時、生田正庵は五十四歳。次に生田正庵に関する全文を紹介する。

生田子。名中孚。字吉卿。通称格。号正庵。兵庫県人。初学先子。既而從南禪寺誦湛參禪。又訪楠本翁於針洲。聽程朱之說。今上京寓居。乃日夕從予講学。志道懇切。

又東正堂は『藏春閣詩存稿』の卷末に「藏春閣詩存稿関係諸氏」を附録している。「関係者」とは次の通り。

所謂関係者。謂撰序跋者並投資助印費者。此其人。学問業務。雖有各異。要之。凡皆世之有意於我者也。因悉列記其氏名字号於左。(順次以五十音)。丙寅四月正堂書。

丙寅は大正十五年。総勢三十八名(赤穴子敬・荒川希陶・朝枝裕・生田正庵・依知川敦・内山茂・江木翼・岡直養・岡田亀太郎・小川淵・岡村又雄・河田清堅・桑原壽一・近藤慶一・白銀若水・柴田甚五郎・須内季吉・武内箕山・龍口龍尾・千葉三吉・永田新・西治興・林景敏・長谷井超山・東乙彦・広瀬素行・古井時幾・藤田俊・福島成行・北條和楽・前橋佐藏・村田鉄・門司天山・山田準・山本章・安村任・横田恭・横道復生)。その四番目に生田正庵が紹介されている。影の形に添う如く東正堂と共に生きた生田正庵を東正堂が如何に理解していたかを示す一文なので、次に全文を紹介する。時に東正堂は六十七歳、生田正庵は五十七歳。

生田氏。名は中孚。字吉卿。通称各。号正庵。兵庫県人。初学先子。既而從南禪寺毒湛參禪。又訪楠本碩水翁於針洲。聽程朱之說。其上京寓居。乃日夕從予。講陽明王氏之学。而其於易学嗜好特至。予近年獲成周易洪範。釋説及啓蒙繹考等諸書。皆吉卿之功勞。與而故予每云。吉卿我之蔡元定也。

『困知統録』卷末の關係諸氏と『藏春閣詩存稿』卷末の關係諸氏の両方に掲載された人物は七名(生田正庵・桑原壽一・白銀若水・柴田甚五郎・武内箕山・龍口龍尾・門司天山)。

「吉卿は私の蔡元定なり」という師匠の文言を生前の生田正庵はしかと読んだ。どんな思いをしたであろうか。蔡元定は朱子の門人であると自認していたが、朱子が蔡元定を弟子ではなく、同伴者であると確認した。その発言に倣った表現である。よく生田正庵の本領を的確に捉えた発言である。東正堂が逝去したその翌年に生田正庵は逝去した。二人の年齢差は十歳であった。

この種の年譜は完全を期しがたい。不備は承知している。博雅の士のご教示を待つて補正していきたい。

生田正庵年譜稿

一八七〇年。明治三年。庚午。一歳。

○十月二十五日。兵庫県神東郡（のち神崎郡）田原村に生まれる。幼名は喜市。のち中孚と改める。通称は格。

字は吉卿。正庵はその号である。のち、いくつかの号がある。生家は代々農村の地主。（荒木見悟「生田正

庵小伝」）

一八七一年。明治四年。辛未。二歳。

一八七二年。明治五年。壬申。三歳。

一八七三年。明治六年。癸酉。四歳。

一八七四年。明治七年。甲戌。五歳。

一八七五年。明治八年。乙亥。六歳。

一八七六年。明治九年。丙子。七歳。

一八七七年。明治十年。丁丑。八歳。

- 一八七八年。明治十一年。戊寅。九歳。
- 一八七九年。明治十二年。己卯。十歳。
- 一八八〇年。明治十三年。庚辰。十一歳。
- 一八八一年。明治十四年。辛巳。十二歳。
- 一八八二年。明治十五年。壬午。十三歳。
- 一八八三年。明治十六年。癸未。十四歳。
- 一八八四年。明治十七年。甲申。十五歳。

○岩国西郊の保津村の東澤瀉の私塾に入門。澤瀉が突然私塾を閉じて隱遁生活に入ったので、嫡男の東敬治の證入社に入門。約二年間、保津に滞在。(荒木見悟「生田正庵小伝」)

○「私が正堂先生の門に在りしは、明治二十年の頃で、今より三十年以前のことでありませう。今日多少陽明学に心を寄せる様になりましたのは、澤瀉先生正堂先生両先生の御庇蔭であるのです。併し在塾中は、両先生に陽明の学説を聞いて居ましたが、聞いて居るときは、成程面白ひ学問と感じて居りましたがけれども、其の説の円滑なる為か、一向其の要領を得ずして、半途で帰国した様なことで、其の後は師もなければ友もなく、其の間には心も變り、専一に力を用ひて、研究がならなかつたのです。」(『陽明学研究』百四号。大正六年八月一日刊)。「心も變わり」とは楠本碩水に質問の書簡を送り、毒湛禪師に參禪したことを指す。

- 一八八五年。明治十八年。乙酉。十六歳。
- 一八八六年。明治十九年。丙戌。十七歳。
- 一八八七年。明治二十年。丁亥。十八歳。

一八八八年。明治二十一年。戊子。十九歳。

一八八九年。明治二十二年。己丑。二十歳。

一八九〇年。明治二十三年。庚寅。二十一歳。

○二月。楠本碩水に書簡を送り、『近思録』巻四の蘇季明問章の未発と既発の關係を取り上げ両者の区分を質問する。(荒木見悟「生田正庵小伝」)

○三月十一日。長崎縣針生の楠本碩水に入門許可の書簡を送る。(荒木見悟「生田正庵小伝」)

一八九一年。明治二十四年。辛卯。二十二歳。

一八九二年。明治二十五年。壬辰。二十三歳。

一八九三年。明治二十六年。癸巳。二十四歳。

○十一月。楠本碩水に書簡を送り、「大学・中庸・近思録は、学理、道德の規矩、初学の急務と相認、易又其次耳。当時、易を読むの師なく書なし。苦心致居候。願くは間々以て御指南を乞」と。

一八九四年。明治二十七年。甲午。二十五歳。

○十月十七日。生田信『仁義禮智説』刊行。奥付「明治二十七年十月十日印刷。同年十月十七日出版。播磨國神東郡田原村ノ内南田原村三百二十七番地。著作者兼発行者 生田喜市。大阪市東区北久太郎町貳丁目六十六番屋敷。株式会社大阪活版製造所。印刷社。谷口黙次」。『仁義禮智説』は九州大学文学部図書室所蔵「崎門文库」所蔵。整理番号十九。

一八九五年。明治二十八年。乙未。二十六歳。

一八九六年。明治二十九年。丙申。二十七歳。

一八九七年。明治三十年。丁酉。二十八歳。

○明治三十年代に京都に移住し南禅寺の毒湛老師に参禅。五六年間熱心な居士として生活する。特に華嚴学を探究する。

「僕中年仏に迷ひしは、其の修むる所の儒に得る所なきに因るも、当時最も其浅薄を疑ひ、道を仏に求めんと欲し、勉て仏典を読む。其の教理の巧妙なるに益々研究すること年あり。（中略）僕初め華嚴の巧妙なる教理に驚くも、終に得る所なくして一転禅に入り、或禅僧に就て其の道を究んと、驚馬に数鞭を加へて入室参禅す。無字の一公案を了るの際に於て、図らずも道若し斯の如くならんには、恐くは脱然の期なかるべしと。遂に此の道の近きにあるを知らずして、之を遠きに求むるの非を知る」（『陽明学』百二十四号、「贈某氏和牘」。大正八年五月一日刊。この某氏は亀谷天尊）

一八九八年。明治三十一年。戊戌。二十九歳。

一八九九年。明治三十二年。己亥。三十歳。

○十月二十九日。浅見綱齋著『周易本義師説』卷元。書写。「十月念九日写了。中孚」。崎門文庫所蔵。整理番号百十八。

○十一月六日。浅見綱齋著『周易本義師説』卷亨。書写。「十一月六日写了。中孚」。崎門文庫所蔵。整理番号百十八。

○十一月十三日。浅見綱齋著『周易本義師説』卷利。書写。「十一月十三日写了。中孚」。崎門文庫所蔵。整理番号百十八。

○十一月二十一日。浅見綱齋著『周易本義師説』卷貞。書写。「明治三十二年十一月念一日。正庵写」。中孚生

印」〔吉卿〕方印。崎門文庫所蔵。整理番号百十八。

一九〇〇年。明治三十三年。庚子。三十一歳。

○二月十四日。『浅見綱齋易学啓蒙師説』筆写。卷末に「明治三十三年二月十日正庵写」。崎門文庫所蔵。整理番号五十一。

一九〇一年。明治三十四年。辛丑。三十二歳。

一九〇二年。明治三十五年。壬寅。三十三歳。

一九〇三年。明治三十六年。癸卯。三十四歳。

一九〇四年。明治三十七年。甲辰。三十五歳。

一九〇五年。明治三十八年。乙巳。三十六歳。

一九〇六年。明治三十九年。丙午。三十七歳。

○五月十五日。明善学舎に金式円を寄附（『王学雜誌』一卷三号「社告」。明治三十九年五月十五日刊）

○七月十五日。「陰陽と因果」（『王学雜誌』一卷五号。明治三十九年七月十五日刊）

一九〇七年。明治四十年。丁未。三十八歳。

○二月十五日。「予亦謹次亀谷天尊君時事有感之韻」（『王学雜誌』一卷十二号。明治四十年二月十五日刊）。「予亦」

と云うのは、亀谷天尊「時事有感東大雅正」（『王学雜誌』一卷五号。明治三十九年七月十五日刊）について、先に勝公堂「予読王学雜誌亀谷天尊君時事有感之詩謹次其韻且請是于正堂先生」（『王学雜誌』一卷九号。明治三十九年十一月十五日刊）があり、それを承けての次韻であつたからである。

一九〇八年。明治四十一年。戊申。三十九歳。

○五月三十一日。針生島に楠本碩水を訪ね、六月三日に辞去する。(「碩水日記」)。

○六月三日。針生島を出発して佐世保で列車に乗り久留米に着き、小倉経由で中津駅に到着して一泊。

○六月四日。耶馬溪を見学して門司に一泊。

○六月五日。馬関に渡り下関条約締結の場所を見学すること数時間、馬関を出発して夕刻に嚴嶋に参詣し、広島に下車せずに福山に向かう。

○六月六日。福山に到着し、門田重長氏に面会。楠本碩水の伝言を伝える。直に辞去し、備前岡山に至り、国清寺に知己(毒漭門下の同参か)を訪ね、後楽園を遊覧。この日の内に、姫路より播但線にて福崎駅下車、田原村の自宅に帰宅したか。

○六月七日。帰宅後に楠本碩水に礼状を送る。帰途の日程は次の礼状に因る。

「拝呈仕候。過日推参仕、御親切なる明誨を受け、其益不少、難有存候。滞在中は分外の御馳走を賜り、御礼申上度候。久敷滞在御迷惑をお掛候次第は真平御海容被下度奉謝候。偕高堂を立ち佐世保に至り佐世保駅十一時の列車にて久留米に至り、直に引返し豊前の小倉に至り、夫れより中津駅に至り一宿、翌日耶馬溪に至て引返し、門司に至て一宿、翌日馬関に渡り日清定約の引接寺に至り、当時の光況を追想仕候。数時間にして馬関を発し、夕刻嚴嶋に詣り、広嶋に下車せずして、翌日備後福山に至り、門田重長氏を訪ふ。氏は今將に登校せんとするの時にして、唯一応の挨拶に止り、先生の御伝言は慥に通じ置申候。菅茶山翁の遺迹も一覽仕度存候へ共、其家内には病者も有之候様子、門田氏は一覽位には差支も無之様被申候へ共、病者の内へ参り迷惑を掛候は宜からずと思ひ、直に去て備前に至り、国清寺なる知己人の内に至り、備前殿の後楽園に遊び、昨日帰宅仕候次第に御坐候。乍憚御休神下度。其他申上度事も御坐候。後便

に譲り申度候」

○六月十六日。三宅尚齋著『論語筆記』。書写。卷一の卷末に「学而為政。戊申六月十六日。借楠本碩水先生之書補写」とある。卷十二の卷末に「先進顔淵篇。戊申六月二十日借碩水先生之書補写。生田中孚」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二百三十一。

○十一月二十七日。久米訂齋著『久米先生講席打聞』書写。卷末に「四十一年十一月二十七日写終」とある。崎門文庫所収。整理番号八十四。

○十二月。楠本碩水の生田正庵宛書簡「崎門諸儒著書持合の物は、何時も差送り可申候へば、無遠慮御申越相成度候」(生田正庵小伝)

一九〇九年。明治四十二年。己酉。四十歳。

○この年、楠本碩水は「当理而無私則仁矣」という李延平の語を体認涵養せよと生田正庵に教示する。生田正庵はこの教示を「克己復礼」と受けとめ、初学は亜聖顔子とは異なるから、「手に手を入れて細密なる工夫を用ひざれば折角の用力も閑工夫と成り果てる」とし、「存養は殊に大切にして活潑々地生々たる、切れば血が出る如き本心の体を存する工夫、此工夫成て窮理も自ら親切なる事と存じ候」と返辞する。(生田正庵小伝)

○十一月二十七日。『拙修集』巻元。書写。「十一月二十七日写了」とある。「正庵蔵書」長方印。崎門文庫所蔵。整理番号八十四。

○十二月六日。『拙修集』巻亨。書写。「十二月六日写了」とある。崎門文庫所蔵。番号八十四。

○十二月(七、十九)日。『拙修集』巻利。書写。崎門文庫所蔵。整理番号八十四。

○十二月二十日。『拙修集』巻貞。書写。「四十二年十二月二十日。写了」。裏表紙に「明治四十二年二十日。正

庵謹写」とある。崎門文庫所蔵。整理番号八十四。

○十二月二十日。楠本碩水より清儒吳廷棟の『拙修集』を拝借し筆写し終わる。卷十に収める「拙修書室記」に感銘して一文を草し、翌十二月二十一日に楠本碩水に送り意見を求める。碩水が返書を認めたか否かは不明。生田正庵は自らの書齋を「魯修書堂」と命名し、東正堂が「魯修書室記」を撰する（『藏春閣文稿』巻五所収。大正元年一月作）。（生田正庵小伝）。

「拙修書室記、誠に学者に親切と存候。鈍漢も修養すれば必ずしも鈍漢に終らず。小生の如き愚中の愚、拙中の拙は、殊更困勉せざる可らずして、困勉必ず其効なしとせざれば、自棄の病も自然に治候事と存候。拙修の二字、我室に用ひ度御坐候。先賢の室名を襲用するは不都合に候や。御示教御願申候」（十二月二十一日）。

○宇井黙齋著『読思録』全五巻『統録』全二巻。二冊。書写。「明治四十二年」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百八十九。

一九一〇年。明治四十三年。庚戌。四十一歳。

○三月。中村惕斎について「中村惕斎先生は道体明に學術正く、実践躬行、正統なる朱子学者なり」。「其學術自得に係る著書を見るを得ざる」と不満を述べて、果して「真儒」なのかと、楠本碩水に書簡を送って質問している。（生田正庵小伝）

○四月。生田正庵の楠本碩水宛返書「崎門諸儒の遺書は細密親切、殊に師説の如きは、親く聴講の感有之候。先儒の遺墨を拝するに其音容に接する心地仕候」（生田正庵小伝）

○十一月二十七日。稲葉黙齋述『道学標的講義』。書写。「明治四十三年十一月二十七日写之。元楠本碩水先生蔵

- 書。正庵学人」とある。「正庵学人」の方印。「正庵藏書」長方印。崎門文庫所蔵。整理番号百八十一。
- 十二月五日。益田立軒著『仲子語録』全五卷一冊。書写。「明治四十三年十二月五日写了。但第一卷ハ全シ。以下卷ハ抜粹写ナリ。元本ハ六冊。共紙數百枚アリ」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百六十八。
- 一九一一年。明治四十四年。辛亥。四十二歳。
- 三月十六日。金子霜山著『四書択言』卷五六。論語第一冊学而至里仁。書写。裏表紙「四十四年三月十六日夜十時終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二十二。
- 三月二十五日。金子霜山著『四書択言』卷七八。論語第二冊公冶長至泰伯。書写。裏表紙「四十四年三月二十日五日夜写終。六十九枚」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二十二。
- 四月十三日。金子霜山著『四書択言』卷九。論語第三冊先進。書写。裏表紙「三十六枚。四月十三日終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二十二。
- 五月二日。金子霜山著『四書択言』卷十。論語第四冊顔淵子路検憲問。書写。裏表紙「四十四年五月二日終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二十二。
- 五月六日。金子霜山著『四書択言』卷十一十二。論語第五冊衛靈公至堯曰。書写。裏表紙「四十四年五月六日終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二十二。
- 五月十日。金子霜山著『四書択言』卷十三十四。孟子第一冊梁惠王上下。書写。「四十四年五月十日終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二十一。
- 五月二十一日。金子霜山著『四書択言』卷十五十八。孟子第二冊公孫丑上下、滕文公上下。書写。「五月二十一日終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二十一。

○五月二十七日。金子霜山著『四書扨言』卷十九至二十一。孟子第三冊離婁上下、万章上下。書写。「二十七日終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二十一。

○六月三日。金子霜山著『四書扨言』卷二十二至二十四。孟子第四冊告子上下。書写。「四十四年六月三日写終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二十一。

○六月七日。金子霜山著『四書扨言』卷二十五至二十六。孟子第五冊尽心上下。書写。「明治四十四年六月七日写終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二十一。

○八月一日。「復正堂先生書」付「正堂評」。『陽明学』三十四号（明治四十四年八月一日刊）

○九月十七日。金子霜山著『易学啓蒙纂略』全四卷三冊。上中巻筆写。中巻裏に「明治四十四年九月十七日写終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号五十八。

○九月二十二日。金子霜山著『易学啓蒙纂略』下巻を筆写。下巻裏表紙に「四十四年九月二十二日」とある。崎門文庫所蔵。整理番号五十八。

○九月二十七日。金子霜山著『周易本義纂要』巻一。書写。「四十四年九月二十七日終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百十七。

○九月三十日。金子霜山著『周易本義纂要』巻二。書写。「四十四年九月三十日終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百十七。

○十月一日。「里見無声君説『逆境に處する思念法』評論」（本誌第三十四号雜録欄参照）。『陽明学』三十六号（明治四十四年十月一日刊）

○十月三日。金子霜山著『周易本義纂要』巻三。書写。「四十四年十月三日終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号

号百十七。

○十月六日。金子霜山著『周易本義纂要』卷四。書写。「四十四年十月六日終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百十七。

○十月（七、十二）日。金子霜山著『周易本義纂要』卷五。書写。崎門文庫所蔵。整理番号百十七。

○十月十二日。金子霜山著『周易本義纂要』卷六。書写。「四十四年十月十二日」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百十七。

○十月二十一日。金子霜山著『周易本義纂要』卷七。書写。「四十四年十月二十一日終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百十七。

○十月二十四日。金子霜山著『周易本義纂要』卷九至十一。書写。「四十四年十月二十四日」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百十七。

○十二月十四日。月田蒙齋著『蒙齋先生遺書』一冊。書写。「明治辛亥十二月十四日以碩水先生自筆之本写之。

正庵生田頤貞」とある。「頤貞生印」「正庵」方印。「正庵藏書」長方印。崎門文庫所蔵。整理番号二百七。

○楠本碩水に書簡を送り「博聞約礼」の所信をのべて教示を乞う。（生田正庵小伝）

一九一二年。明治四十五年。壬子。四十三歳。

○七月三十日。「大正」に改元。

○九月二日。楠本碩水著『随得録』卷乾。書写。末葉に「大正元年九月二日写終」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二百三十七。

○十一月十一日に針生島に楠本碩水を再訪問。十一月十八日に辞去。（『碩水日記』）

○十一月二十二日。楠本宛礼状が届く。「御教話謹聴候時は、何となく愉快を覚へ、終に永滞留と相成恐縮の至に候」を送る。（生田正庵小伝）

○十一月二十五日。楠本正翼が生田正庵に書簡を送る。楠本家の人々の好意で先儒の軸幅を入手する。（生田正庵小伝）

○十二月二十七日。根岸行藏著『根岸先生一件録』。書写。「根岸先生一件録二冊。借楠本正翼君之藏本而写。大正元年十二月念七日。正庵学人」とある。崎門文庫所藏。整理番号百九十五。

○十二月三十一日。大塚退野（孚齋）著『退野先生遺稿』。書写。卷末に「退野先生遺稿一冊。借楠本君翔氏之藏本而写之。但此書有別本。孚齋存稿。其此書。詳略不同云。大正元年臘月晦日。正庵生田頤貞」「頤貞生印」「正庵」方印。「正庵藏書」長方印。崎門文庫所藏。整理番号百六十六。

一九一三年。大正二年。癸丑。四十四歳。

○五月七日。楠本碩水に「存養」論を送る。（生田正庵小伝）

「居敬存養の工夫は甚だ難く、強て意を用ゆれば、究屈にて滋味なく、我と我が身を苦めるは、徒に静坐とか主一無適とかの文字になづんで、其の静坐たる主意と、主一無適の主一無適たる主意が明らかならぬ故と存候。静坐と云ひ、主一無適と云は、其放心して目に物を見れば、美の為に心動き、耳に声を聞けば、淫声に流れ、其外種々外物に接する毎に、内心の本領を失ふ者の為にせる工夫なる事を知るべきなり。静坐して徒らに静かならんとせば、心益々散り、主一無適ならんとせば、心益々四方に渡り、中々真の静坐主一になり難きは、心の習ひなり。敬の工夫は、有事無事共に心の本領に立ち帰る事なり。己れの

本領の心底に立ち帰りみれば、外馳の心猿意馬も去て、自然に静坐になると存候。本心に立ち帰り見れば、自ら心の本領を欺むく病もうせて、外物の為に心も動されずして、能く定るときは、動も亦静なり。何ぞ山中に静坐して坐禪觀念の法に陥らんや。要するに静坐は、外馳して自ら心を欺きををるを収斂して、放心を求むる法なり。放心を求むれば、自ら道に入り、返身而誠なり。」

この「存養」論に対する楠本碩水の評語は次の通り。

「大概得之。朱子曰、譬如梨柿生時酸渋喫不得。熟後自是一段可美。相去大遠。只在熟與不熟之間。然則存養亦在熟之而已矣」（生田正庵小伝）

○九月三日。楠本正翼、生田正庵宛書簡。（生田正庵小伝）

「正堂翁澤瀉会に出席の為、御下向相成申候由、如何の景況にや。頃者、友人東京より帰省相咄中に、陽明学会も稍資金欠乏らしき模様由、果して然らば嘸困候事と存候。但会の業務即雜誌編集に全力を注ぎ、復た餘力の自修に及ぶなき有様も聞き申候。可惜事に御坐候」

○十一月十五日。平野深淵著『程易夜話・程易雑話』全二卷一冊。書写。「大正二年十一月十五日写之。正庵学人」とある。「正庵蔵書」長方印。崎門文庫所蔵。整理番号百七十三。

○十二月十日。大橋訥庵著『訥庵先生和牘』。書写。「訥庵先生與楠本端山先生和牘三通。楠本君翔氏謄写以見贈。一読其益不少。可珍藏也。大正二年十二月十日。正庵識」とある。「正庵」方印。「正庵蔵書」長方印。崎門文庫所蔵。整理番号百九十。

一九一四年。大正三年。甲寅。四十五歳。

○二月十一日。桜田虎門著『論語難章講義』三冊。書写。卷末に「論語難章講義三冊。大正三年二月十一日始。

同三月十七日写終」とある。同文が末葉遊紙にある。崎門文庫所蔵。整理番号二百三十。

○三月。中村蘭林著『通書解翼義』全二巻一冊。書写。「借楠本正翼氏之藏本。使某写之。大正三年三月。正庵学人」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百七十二。

○四月五日。『若林強斎先生雜記』。書写。卷末に「右当舎修斎所記強斎先生語録。借西肥楠本君翔氏藏書而写之。大正三年四月五日。正庵学人生田頤貞」とある。「正庵」方印。「正庵藏書」長方印。崎門文庫所蔵。整理番号二百三十五。

○四月十日。『諸老遺文集』。書写。「大正三年四月十日写終」とある。「正庵藏書」長方印。「正庵学人」方印。崎門文庫所蔵。整理番号百三十。

○四月十四日。『諸老文録』。書写。「大正三年四月十四日。正庵」とある。顧問文庫所蔵。

○六月一日。「致良知の説」(正堂点評)。『陽明学』六十八号(大正三年六月一日刊)

○八月七日。東正堂が鹿兒島訪問の帰途、針生島に楠本碩水を訪問。正翼の指示で楠本正継が船で迎える。東正堂の碩水面謁の場に碩水・正翼・正継同席か。

○八月八日。東正堂は楠本正翼氏宅に宿泊。

○八月十一日。東正堂は楠本碩水先生に辞去する。針生での碩水との会談中に生田正庵が上京することが話題になる。(「東正堂年譜稿」「生田正庵小伝」)

○八月十六日。晩刻、東正堂は姫路より播但線で福崎駅に下車。田原村に生田正庵を訪問。生田正庵は執礼極恭。学問の道を商量する。東正堂は二宿。後養父郡宿南に青溪書院訪問。(「東正堂年譜稿」)

○九月二日。楠本正翼、生田正庵に「あなたの良知説は、正堂翁も深く感じ入っておられました」と書き送る。

〔生田正庵小伝〕。「あなたの良知説」とは『陽明学』六十八号所載の「致良知の説」のことか。

一九一五年。大正四年。乙卯。四十六歳。

○一月十八日。楠本碩水が『随得録』巻坤を生田正庵に寄送して謄写を依頼する。『随得録』巻坤の末葉に「大正四年一月十八日。寄來其稿本属謄写。余別写本蔵之。存其削除者。唯欲見其得失痕跡耳」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二百三十七。

○二月七日。楠本碩水著『随得録』乾坤二冊。書写識語。巻乾末葉に「大正元年九月二日写終」とある。巻坤末葉に「大正四年一月十八日。先生寄來其稿本属謄写。余別写本蔵之。存其削除者。唯欲見其得失之痕跡耳。大正四年二月なのか。正庵学人識」とある。「正庵」方印。崎門文庫所蔵。整理番号二百三十七。

〔崎門文庫目録〕に不掲載。

○四月一日。「朱王致知格物説」付「正堂先生批」。『陽明学』七十八号（大正四年四月一日刊）

○四月九日。稲葉迂斎著『迂斎先生統和書集』全五巻善五冊。筆写。巻末に「大正四年四月九日」表表紙表に「正庵朱批」とある。崎門文庫所蔵。整理番号五十六。

○九月一日。「朱王致知格物説（承前）」付「正堂再批」。『陽明学』七十九号（大正四年九月一日刊）

○十二月一日。「題雜誌陽明学合冊首（大正四年十月十日。生田正庵識）。『陽明学』八十六号（大正四年十二月一日刊）

○この年の暮れに岡彪村と面識を獲る。岡彪村が正庵没後遺文の選集刊行の労をとる。（生田正庵小伝）
一九一六年。大正五年。丙辰。四十七歳。

○二月。楠本正翼、生田正庵あて書簡。岡彪村は詩文に長じてはいるが、心性理気のことには遺憾な点が少なく

なかつたが、近年來學問が長進してきた。(生田正庵小伝)

○五月一日。「四言教四無四有の説」付「正堂評」。『陽明学』九十一号(大正五年五月一日刊)

○五月。生田正庵、楠本碩水に書簡を送る。(生田正庵小伝)。

「謹啓。過日は御手教忝拝見仕候。承れば昨年以來の御病氣は御全快にて、庭前の御歩行も被遊候は、大慶に奉存候。夫に付て御一眼失明御執筆御不自由の由、残念の至に奉存候。是迄も愚書呈し御示教も御願申度存候へ共、御衰弱被遊候折柄、御無礼と存じ等閑附、且御見舞も不申上万謝候。寸志一封以為替御見舞呈上申度、御笑納可被下候。拜。

申も恐入候事に存候へ共、先生には極老の域に達せられ候上、御病後の事なれば御示教に預る事は最早叶ひ間敷と思へば、残念の至に存候。今一応拝顔を得度は万々なれども、家庭上左様にも参り兼、遺憾此事に存候。夫に付ては種々申上度事も不少、且御願申上度も存候事柄も有之候も、今更申上るも恐れ多く、何れ後便に申上度存候。時下御自重專一に奉祈候。」

この書簡の封筒に楠本碩水は「返事入用」と記入。送付されたか否かは不明。この年の十二月二十三日に楠本碩水は逝去する。(生田正庵小伝)

○五月二十六日。吉村秋陽著『格致臆議』附大橋池田三先生往復三書。筆写。卷末葉に「大正五年五月六日正庵写」とある。

○六月一日。「四言教四無四有説(承前)」付「正堂評」。『陽明学』九十二号(大正五年六月一日刊)

○六月一日。松村卓之助「応生田子之需寄題其魯修齋」(『陽明学』九十二号。大正五年六月一日刊)

○六月六日。聶双江著『双江先生困勉録・羅洪先批註』全八卷。書写。「大正五年六月六日。正庵写」とある。

卷末に朱書「雙江先生之学具於此。当時此書之出。同門頗有議論。然予謂陽明先生要旨。先生却能得之。先生可謂真能学陽明先生者。本邦藤樹先生学大似之。昭和己巳五月三日閱了識。七十翁正堂敬治順甫氏」とある。「昭和己巳」は昭和四年。東敬治七十歳。崎門文庫所蔵。整理番号百四十八。

○八月一日。幸田誠之著『幸田先生語録・続編』全三卷一冊。書写。卷末に「幸田先生ハ野田剛斎（直方門人）之門人也。名誠之。晚改精義。称善一善太郎。大正五年八月一日。借楠本正翼氏之蔵本而使某写之。正庵蔵」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二百十八。

○十月一日。「陽明学第九十一号四無四有説評語質疑」付「正堂再評」。『陽明学』九十五号（大正五年十月一日刊）

○十一月一日。「誠意説」付「正堂評」。『陽明学』九十六号（大正五年十一月一日刊）

○十二月二十三日。楠本碩水逝去。

一九一七年。大正六年。丁己。四十八歳。

○一月十九日。大塚久成編『紫陽言仁要録』。書写。「大正六年一月十有九日写之。正庵格」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百二十七。

○二月二十二日。胡居仁著『文敬胡先生集』卷一。書写。「大正六年二月念二日写。正庵学人」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二百。

○五月二十七日。陽明学会清遊会で「陽明学についての所感」について講演。会場は麻布六本木町深広寺・佐藤一斎先生の菩提所。生出太癖氏の代役。この時の講演内容が『陽明学』百五号掲載の「陽明学研究について」。生田正庵はこの五月に上京したのか。「私は正堂先生とは師弟の関係ありて、早くより此の陽明学会

に入りまして、諸君の御説も雑談（誌）上で拝見して楽しんで居りましたが、此御当地へ参りまして、今日此度清遊会で諸君の御目に懸りますのは誠に愉快に存じます」（『陽明学研究について』冒頭。）朱子学の弊害を述べ、更に陽明学という看板を掛けて王陽明の学説を学ぶようでは腐儒無用学であるから、「本心に学ぶ」という王陽明・王龍溪の原点に帰れと言う。心学の再建を訴える。

○八月一日。「陽明学研究に就て」。「陽明学」百五号（大正六年八月一日刊）

○十二月一日。「孟子尽心首章の説」。「陽明学」百八号（大正六年十二月一日刊）

一九一八年。大正七年。戊午。四十九歳。

○五月一日。「善惡の標準」。「陽明学」百十三号（大正七年五月一日刊）

○六月一日。「善惡の標準（承前）」。「陽明学」百十四号（大正七年六月一日刊）

○九月十日。楠本正翼、生田正庵に書簡を送る。（生田正庵小伝）

「賢台致良知詮義なる御著述有之趣、愈々御研精感入候。しかし致良知は畢竟言詮上の穿鑿にあらざして、体之身実行するが本意にて、致良知理屈は已に明々白々、今更詮義の必要も無之と存候。如何。」

○十二月一日。「良知未発已発工夫論」。「陽明学」百十九号（大正七年十二月三十一日刊）

一九一九年。大正八年。己未。五十歳。

○五月一日。「得庵翁和牘竝正堂先生附言後」。「陽明学」百二十四号（大正八年五月一日刊）。

「得庵翁和牘竝正堂先生附言」は『王学雜誌』二卷十号（明治四十年十二月十五日刊）に掲載されている。

「故子爵鳥尾得庵翁手翰」の発信日は五月二十一日。鳥尾得庵。本名は小弥太。萩の人。弘化四年（一八四七年）—明治三十八年（一九〇五年）。享年五十九。（鳥尾光は嗣子。東正堂の『王学雜誌』『陽明学』の有力

會員。得庵の統一学社を継承。曾田文甫が支える。

○五月二十五日。東正堂、生田正庵宛書簡。(「生田正庵小伝」)

「先書々書共に入手。(雑誌陽明学にのせる) 原稿何にてもよし。精々御届被下。儒仏分界論最佳。會員中
大半有髮僧多し。御論是非入用に被存候。鐔津文集御手に入らざりしとの事、遺憾なり。猶仏法金湯録は
御存知なるか。中々振ひたる文筆を以て儒をそしり、(原注、最も朱子) 仏を弁護せるもの、先子(澤瀉を
指す)の写本を所持す。入御覧てもよし。心の奥底(の)書是非一読仕度。石井(平太)翁演說筆記は御
説の通りにて宜候間、是は来月五日までに出来れば都合よろし。今日或は貴君も来るかとも存候処、岡山
県(山田)方谷先生高弟の岡本魏と申す老人、同志川村経山来談中突然来訪、三人鼎坐学談頗面白、心中
重々貴君なきを憾み申候。餘は後に可申上。聊御返事まで。」

○六月一日。「蔵春閣記」。『陽明学』百二十五号(大正八年六月一日刊)

○六月一日。「贈某氏和牘」。『陽明学』百二十五号(大正八年六月一日刊)

○七月一日。「佛の無明起因を論ず」。『陽明学』百二十六号(大正八年七月一日刊)

○八月。東正堂、生田正庵宛葉書(生田家蔵)。「生田正庵小伝」。楠本正継が東京大学に進学し東家生田家に入
りする。

「易講義の事、昨日繫辭伝と申したるも、正継などでは、これまでまるで素養あるまじければ、乾坤二卦
を先ず講じたのちに繫辭伝を聞かねば、丸で分らぬこととなるべし。因て先ず乾坤二卦とすべく、なお彼
は夜中とせば毎日通学するかを聞きてくれ。(中略) 貴君、正継の様子を聴きたる上、貴君の意向を併し
て我に向けよ。その上、いよいよ決すべし」

○十月一日。「治国の要」。『陽明学』百二十八号（大正八年十月一日刊）

一九二〇年。大正九年。庚申。五十一歳。

○一月一日。「顔楽説」。『陽明学』百三十一号（大正九年一月一日刊）

○八月十七日。『難波木村先生議論覚書上下』書写。（東正堂の藤樹後学資料の書写）

○九月一日。『諸子文通贈答録』書写。（東正堂の藤樹後学資料の書写）

○十月一日。「陽明学の立場から社会学に於ける扶助闘争の二説を論ず」。『陽明学』百三十七号（大正九年十月一日）

一九二一年。大正十年。辛酉。五十二歳。

○東正堂「與生田正庵（七言絶句）」（『藏春閣詩存稿』卷下四十三丁）

○一月一日。「書藤樹先生原人論後」。『陽明学』百三十九号（大正十年一月一日刊）

○一月一日。「致良知説」。『陽明学』百三十九号（大正十年一月一日刊）

○二月一日。「自由とは何ぞや」。『陽明学』百四十号（大正十年二月一日刊）

○三月五日。『擊壤集抄』を東正堂に贈られる。もと東正堂が明治三十六年に編集書写したものを生田正庵が書写した。卷末葉に東正堂の次の識語がある。「白沙嘗以堯夫詩為別傳。蓋別之李杜也。然亦唯其所養不同。未見詩有異傳也。唯是堯夫詩高逸適警。儒家以詩論道。未有出此右者。予頃間三復此集。摘其最會意以為儒家論學詩準則云爾。明治癸卯初夏正堂識」。卷頭一葉の内題の下に「己未秋日、正堂朱批」と朱筆。裏表紙に「大正十年三月五日。正堂先生見贈。正庵。」「正庵之印」「中孚之印」「正庵」の方印有り。

崎門文庫所蔵。整理番号九十。

○五月。東正堂著『困知統録』（藏春閣藏版。大正十二年八月五日發行）に「困知統録序」を執筆。（生田正庵小伝）。

「吾師正堂先生嘗謂予曰。姚江之學在致良知之三字。然其要唯簡易親切而已。故簡易而親切。親切而簡易。則無一而非學也。無一而非道也。後學之於道沿門泥迹而不知親切功夫。是以其議論愈精愈密。而其學愈離愈遠矣。夫道一而已矣。苟我用心親切。則道固不可求之於外。而隨處皆學芻蕘之言。猶可聽也。況於聖賢之言乎。良知之教。其亦唯若此而已矣。予聞之如大夢之始覺。吾若無聞此教。則虛過一生耳。先生曩在山中。既有困知之著。而今書其統録而成。一日示予曰く。出山來終年唯在紅塵堆裏送日。既十有餘年矣。然動忍衝困之間。猶得此數語焉。卿其試序之。予喜而受之。顧先生之學術。未嘗隨後學門牆依傍之習。而有以遠接姚江王子之心伝。是以條條皆自心得之。故其所録多是先儒未發之說。扨誦數過。不復覺手舞之足踏之也。然無他。亦唯不過予所嘗聞簡易親切之旨耳。因書以為序。大正辛酉五月。正庵生田中孚謹識。」（もと読点なし）

○六月一日。「真理問答」。『陽明学』百四十四号（大正十年六月一日刊）

○七月一日。「四言教略説」。『陽明学』百四十五号（大正十年七月一日刊）

○八月一日。「四言教略説（承前）」。『陽明学』百四十六号（大正十年八月一日刊）

○十月一日。「四言教略説（承前）」。『陽明学』百四十七号（大正十年十月一日刊）

一九二二年。大正十一年。壬戌。五十三歳。

○東正堂「遊水戸常磐園觀梅。示同遊生田小林二子。園本係烈公晚年栖息之所云（七言絶句）」（『藏春閣詩存稿』

卷下四十四丁）

- 七月四日。『東條子十八箇条問記』を書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 七月十四日。『北川子示教録』を書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 七月二十二日。『北川子文書集』を東京目白台で書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 七月二十七日。『樋口覚書』を書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 九月一日。『岡山示教録追加』を東京目白台で書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 九月五日。『岡山示教録』巻一を書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 九月九日。『岡山示教録』巻二を書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 九月十五日。『岡山示教録』巻三を書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 九月十九日。『岡山示教録』巻四を書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 九月二十一日。『岡山示教録』巻五を書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 九月二十三日。『岡山示教録』巻六を書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 九月二十六日。『岡山示教録』巻七を書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 十月三日。『二見直養芳簡別録』を書写。(「東正堂の藤樹後学資料の書写」)
- 一九二三年。大正十二年。癸亥。五十四歳。
- 三月三十一日。『良斎篤山論学書』。書写。卷末に「大正十二年三月三十一日。正庵写之」とある。崎門文庫所蔵。整理番号二百二十五。
- 八月一日。『窮理の説』。『陽明学』百六十八号(大正十二年八月一日刊)
- 十一月二十五日。『性理大全会通』卷六。書写。卷末に「大正十二年十一月念五日、正庵写」とある。

○十一月二十八日。『性理大全公通』卷三十一—卷三十六。書写。卷末に「大正十二年十一月念八日、正庵抄写」とある。

一九二四年。大正十三年。甲子。五十五歳。

○四月二日。『十八史略』薄墨摺十三冊を神田小川町の書店で購入。『立齋先生標題解註音釈十八史略』崎門文庫所蔵。番号二百二十二。の巻末に張り紙「十八氏略。薄墨摺十二冊。大正十三年四月二日。東京神田小川□□書店にて求。値二円」とある。

○中秋。東正堂「中秋招生田正庵。对月同酌（七言絶句三首）」（『藏春閣詩存稿』卷下四十七丁）

○九月。東正堂「九月天晴日暖。約生田正庵・桑原筑山。徜徉郊外。而川岡清風亦至。則共携手。半日吟遊甚適。但正庵宿痾未愈。別後寄之。問其狀（七言絶句）」（『藏春閣詩存稿』卷下四十七丁）

○東正堂「生田正庵。招予觀日蓮祭事。人衆雜踏頗盛。日蓮巨今八百餘年。而猶能致人帰向如此。因有此作（七言絶句）」（『藏春閣詩存稿』卷下四十七丁）

一九二五年。大正十四年。乙丑。五十六歳。

○一月二十七日。宋濂著村瀬誨輔編『宋学士文粹』を購入。卷末に「大正十四年一月二十七日柳町書店にて求代五十銭」の書き込み。崎門文庫所蔵。番号百四十六。

○七月七日。三輪執斎著『堯典和釈』一環一冊。書写。卷末に「大正十四年七月なかお東京目白台、正庵写」とある。一葉目に「批点正庵加之」とある。「正庵蔵書」「吉卿」「正庵中孚」の方印あり。崎門文庫所蔵。整理番号七十八。

○十月二十日。東正堂から東澤瀉真筆本『易説』を惠贈される。東正堂の十月十九日發生田正庵あて葉書「昨日

如例夫妻御招ニ願難度奉謝ノ浅イ席上申上候石斎易説先子親写本を割愛呈上供御参考可申ニ付懸故或者一日も早く御覽相成御心慮と察し申上候。今明ハ持去猶終日在宅之筈となり昼ノ間ハ何時とも速来可能候。

十月十九日朝八時五分。敬。表は「小石川区雜司ヶ谷町一。生田格殿。東京市牛込区市ヶ谷河田町十二番地。陽明学会。東敬治」。この葉書の裏面に生田正庵の識語が張り紙されている。「此のはがきに因と大正十四年十月二十日先生宅へ来る此易説写本を賜ふ」と。この『易説』二巻一冊は崎門文庫所蔵。整理番号六十。石斎とは明末の黄道周の号。

○十一月二十日。奥村栄実著『正斎漫録』全二巻二冊を書写。巻末に「大正十四年十一月二十日於東京目白台。正庵写之」とある。「中孚」「吉卿」「正庵藏書」の方印。崎門文庫所蔵。整理番号百七。

○東正堂「春郊散策賞櫻花。入夜而帰。示同遊生田吉卿（七言絶句）」（『藏春閣詩存稿』下四十八丁）
一九二六年。大正十五年。丙寅。五十七歳。

○四月。『藏春閣詩存稿』跋（大正十五年四月。正庵生田中孚吉卿）（『藏春閣詩存稿』巻下巻末）

○四月。東正堂「藏春閣詩存稿関係諸氏」で生田正庵を「吉卿我之蔡元定也」と紹介する。

○八月一日。「易を読む」。『陽明学』百八十六号（大正十五年八月一日刊）

○十月十四日。『岡山先生書簡集』上中下合冊を書写。（『東正堂の藤樹後学資料の書写』）

○十二月二十五日。「昭和」に改元。

一九二七年。昭和二年。丁卯。五十八歳。

○八月一日。「知行合一説」。『陽明学』百九十二号（昭和二年八月一日刊）

一九二八年。昭和三年。戊辰。五十九歳。

○東正堂、生田正庵あて書簡。山口に静養していた東正堂が王陽明没後四百年祭、陽明学談話会設立に関して生田正庵に指示する。(「生田正庵小伝」)

「(東京と山口と) 両々相待て随て転嫁風動の端緒とも可相成かとも存居候。此蔡別して御無理御最と存候。(中略)。貴君も一層責任を生じ御痛心も可有之。然ども此皆学問の地、古人金言候。執事学始密。僕の仕事にても当候へば功夫の実効も分り可申、随分御注意、講学の一進歩御計り可被成正に在今日矣。

(中略) 貴君等大に精神を鼓し脊梁骨を豎立し、盛に斯道の講明を尽察し、永く翼下の雛となる勿れ。」

○七月十三日。佐藤一斎著東正堂輯録「言志余録」書写。巻頭に東正堂の次の「言志余録序」がある。「往年楠本碩水翁寄書云。先師佐藤一斎将出言志録時。多取旧稿刪之。蓋意有所避耳。然其実悉皆陽明王子之要旨也。而其所刪別為書。我亦嘗見之。子試訪則見之。予於是博聞旁搜。以求其書者多年。而無見焉。至於近日。偶聞河田功甫藏中有言志録稿本。功甫祖父藻悔先生。実為一斎先生女婿。其所傳固確。予乃特請而閱之。宛然親筆。塗抹爛如。亦頗有不入現行言志録者。故就而抄之。言志四録中稿。猶闕後録之所。為可恨也。後聞菊池仲昭亦藏一本。謂必是也。及細閱之。則仍其蓋録。而非後録也。然其所取則大有異同。因又抄之。合編而成一書。題曰言志餘録。夫如大賢一斎先生。断簡殘墨。後人豈棄之。矧其於特兪陽明王子之要旨者哉。但未知當時碩水翁所見何如耳。大正十二年癸亥四月。正堂東敬治書于東京牛門藏春閣」。卷末に「昭和三年七月十三日写。正庵」とある。「正庵藏書」の方印。崎門文庫所藏。整理番号九十一。

○八月二十一日。中江藤樹著「藤樹先生後生物語」書写。「昭和三年八月念一日。正庵写」とある。「正庵藏書」長方印。崎門文庫所藏。整理番号百八十四。

○十一月二十九日。東洋大学で王陽明没後四百年祭。陽明学談話会結成。共に生田正庵が東正堂の指示で取り仕

切る。(生田正庵小伝)

一九二九年。昭和四年。己巳。六十歳。

一九三〇年。昭和五年。庚午。六十一歳。

一九三一年。昭和六年。辛未。六十二歳。

○『正堂先生前赤壁賦略解』(昭和辛未八月二十五日。正堂稿)を書写。「正庵写」。崎門文庫所蔵。整理番号百四十五。

一九三二年。昭和七年。壬申。六十三歳。

○十月八日。『中庸説略』。書写。「昭和七年十月八日写畢」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百七十一。

一九三三年。昭和八年。癸酉。六十四歳。

○『王学要略』を執筆する。(生田清の後書き)

一九三四年。昭和九年。甲戌。六十五歳。

一九三五年。昭和十年。乙亥。六十六歳。

○八月一日。東正堂、東京の自宅で逝去。享年七十六歳。(生田正庵小伝)

一九三六年。昭和十一年。丙子。六十七歳。

○六月二十八日。東京大学附属病院で逝去。

○七月二十八日。『詩経訳説』の前半は正庵の筆写。後半は生田賢の筆写。卷末に「昭和十一年七月二十八日写畢。生田賢」とある。崎門文庫所蔵。整理番号百四。

一九三七年。昭和十二年。丁丑。没後一年。

○六月二十八日。『王学要略』刊行。編輯兼発行人生田清。發行所生田清自宅（東京府北多摩郡武蔵野町吉祥寺二〇一七番地）。跋文「昭和八年東亜学芸協会に於いて陽明学論叢を編纂発行するの企画あり先府君にも亦依頼あり此の著は其の為め右の題目の下に執筆せしものなり今筐底より草稿を発見したるにより之を活版に付し先君旧知の諸子に贈呈すと云爾。昭和十二年六月。男清謹識」（『王学要略』卷末）。この『王学要略』は『木村秀吉編『渡邊翁追悼・陽明学研究』（渡邊翁対と陽明学研究刊行会。昭和十三年七月二十五日刊行）に生田清の後書きを省いて収録されている。

○六月二十八日。『正庵文稿』刊行。編輯兼発行人生田清。發行所生田清自宅。「先君子年十五志于学、至岩国游於東澤瀉先生門。既而上京、奉身於王子学者五十年。去歳六月二十八日病没東京。年六十七。終身不上仕途。不求交游。亦不事著述。不掲牌授徒。日夜研学、默座澄心、以体致良知之旨。深憂博学之時弊、每教某以此。其属纘、亦连称審問審問。先是授生平所作文曰、死後版之可也。乃今謹付手民云。昭和十二年丁丑六月。不肖男清謹識」（『正庵文稿』卷末）

『王学要略』『正庵文稿』共に一周忌を記念した出版である。